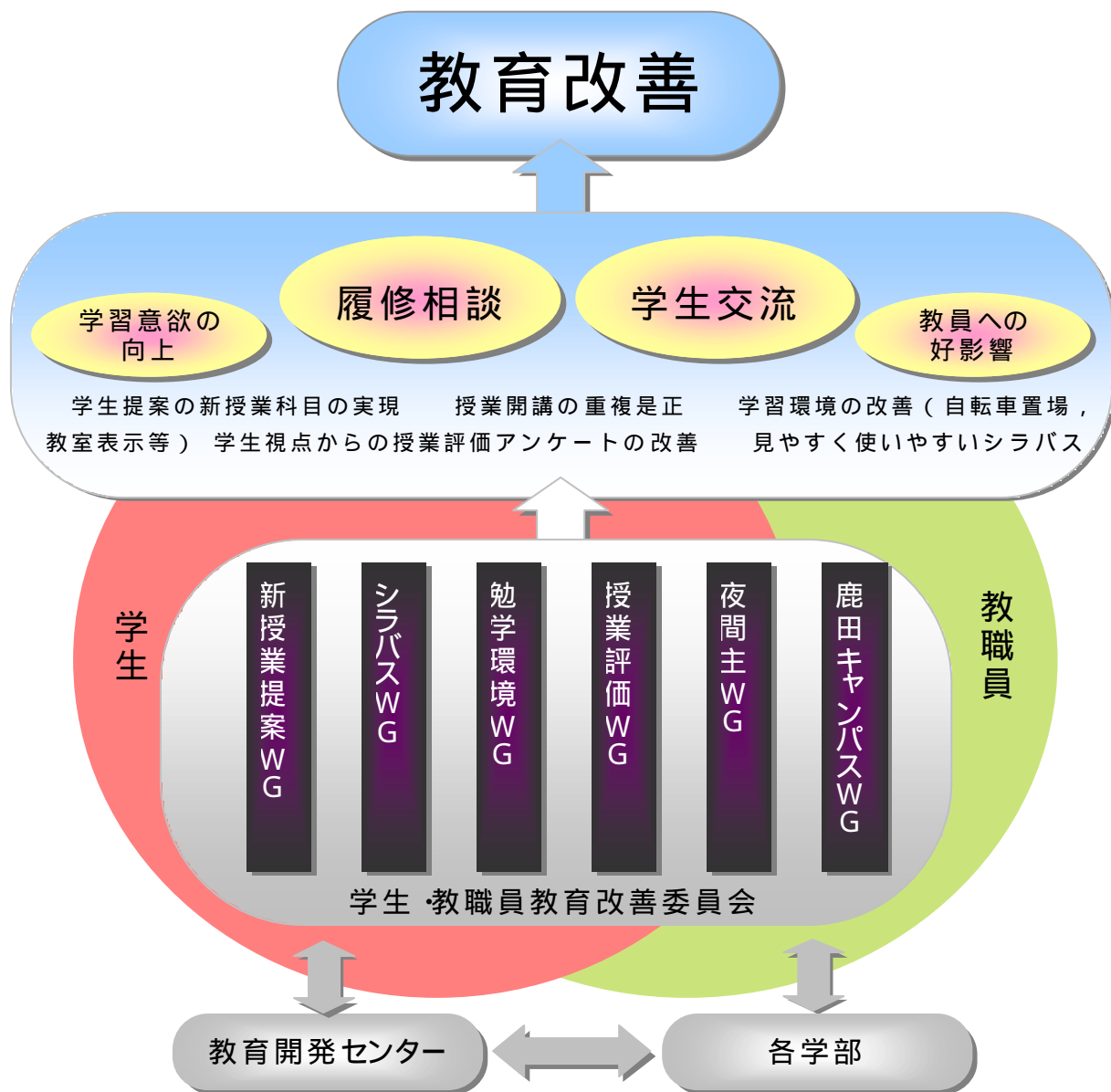


(1) 取組の概要

本学では3年間の助走期間を経て、平成13年度より本格的な学生参画型教育改善を推進している。各学部代表の学生委員と教員委員に職員が加わり、相互対話を中心とした恒常的活動を積み重ねる中で、学生の立場・視点からみて、より望ましい授業が行われ、学生の主体性を伸ばす教育が展開されつつある。例えば、次々と実現する学生提案の新授業科目や、学生の視点から新生に適切なアドバイスをする履修相談会、回答する学生の立場を考慮した授業評価アンケートの改善等を通じて、その成果は多くの学生たちが享受している。それにとどまらず、学ぶ側の意欲向上が教える側にも変化を及ぼし大学教育の根幹を大きく変化させている。学生の主体的参画という新機軸による大学教育改善は現代の大学に不可欠の要素であって、本学の成功例は既に他大学のモデルとなりつつあり、フロンティアとしての本学の社会的責任も大きい。

図1 新機軸「学生の主体的参画」による教育改善システムの概要



(2) 取組の実施プロセスについて 図4

本学では、教育改善を全学的に進めるにあたって、学内の最大構成員である学生の声をしっかり受け止める必要があることが教員間で早くから意識されており、図2のように、平成10年頃から学内の教育シンポジウムでの学生の参加者が目立ち始めたことを受け、平成12年4月には、その年度の**教育シンポジウムの企画者に学生を加える**ことで積極的に動き始めていた。企画者・話題提供者に学生が加わることにより、学生の参加者も増えシンポジウムも例年以上に非常に盛り上がった。結果的には、平成12年6月に「教員中心の大学から学生中心の大学へ」の転換を促す報告書(広中レポート)が文部省(当時)から発表されたことも、本学の取組に拍車をかけることになる。

機が熟したと判断した本学のFD専門委員会は、**学生参画を新機軸とする大学教育改善**を推進するため、その中核となる組織作りにより乗り出し、平成13年1月に「学生・教員FD検討会」の設置を提案した。その後、各学部の賛同を得て、同年7月の同検討会の始動により学生参画型教育改善を本格的に展開し始めたのである。

この取組は、自然と人間の共生 / 「知」の構築と自立 / 世界と地域への情報発信を目指す本学の理念の実現に向けた大学教育体制の再構築の一環であって、委員の学生のみならず、一般学生全体の主体的な学びの広がりや深まりにつながるものである。また、FDからSDへの発展という観点からみると、大学という知的共同体の**構成員(学生・教員・職員)が一体となって教育・研究・社会貢献に打ち込む**ことにつながるという意味で、理想的な大学像を目指すものと言える。

当初から社会的関心も高く、マスコミによる報道も相次いだ。毎年、一般学生を対象に大規模なアンケートを実施して、それらを基に**学生の視点で教育改善に向けた諸提案**を行って次々と実現したり、新入生対象の履修相談会を学生の自主企画(図3)で実施したりする中で、この組織を中核として**学生力を活かした教育改善を進める**という考え方は学内に広く浸透してきている。また、独自の公式ホームページの開設も功を奏し、今日では、岡山大学の特色ある取組として学外にも広く知られるようになって

図2 取組の発展プロセス

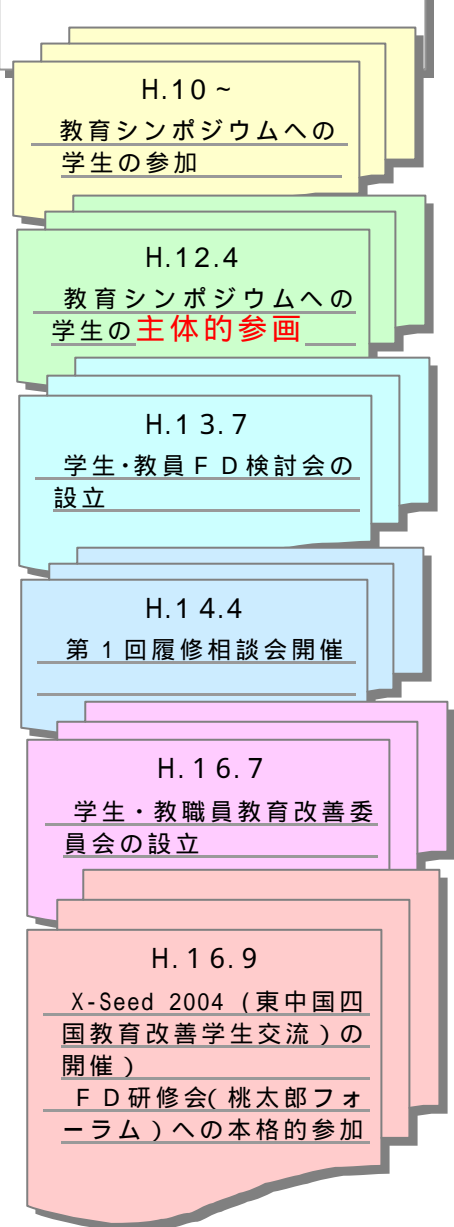


図3 学生の自主企画の例



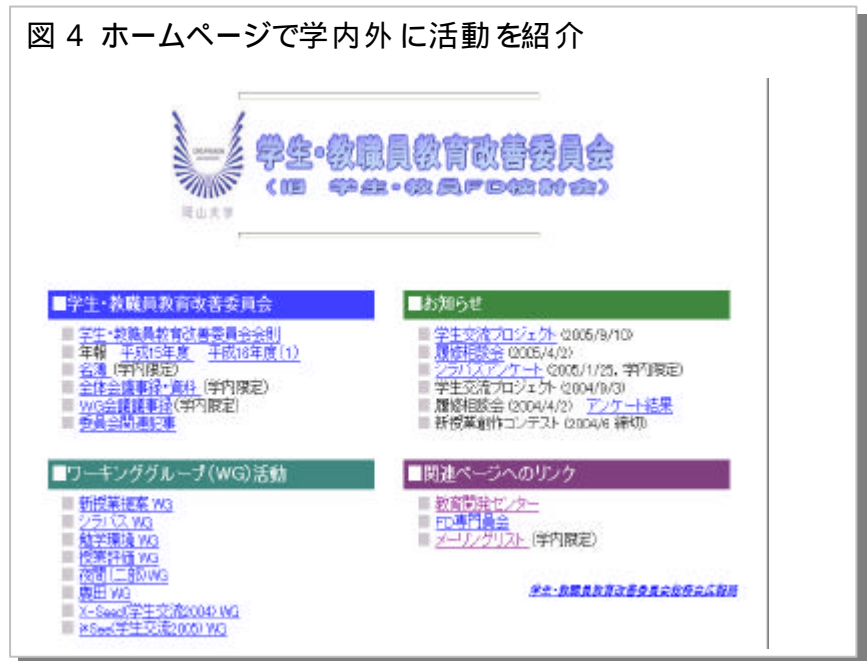
きた。(図4)

平成15年度の特色GPでは、最終ヒアリングまでは進んだものの、実績不足という理由で非採択という結果になったが、その後、学内での支援体制が強化されたこともあって、毎年着実に実績を積み重ねている。

特に平成16年度には、大学側の全面的なバックアップを得て、当初からの懸案であった他大学への波及もスタートすることも出来た。広中レポートの指摘を

待つまでもなく、本学が推進している**学生参画型教育改善は現代の大学の不可欠の要素**であって、多くの大学が、その必要性を強く意識している。他大学に本学の活動をモデルにした類似の活動が広がり、そうした大学との連携を深めることは、本学にとっても大きなメリットがある。

図4 ホームページで学内外に活動を紹介



(3) 取組の特性について

この取組自体は、直接の教育プログラムではなく、むしろ、大学教育の改善を図ることを通じて、**大学全体としての教育・授業の質的向上**を目指し、そのことによって、一般学生の学びの充実に寄与しようとするものである。

実際、シラバスが見やすく使いやすいものになったり、授業評価アンケートが答えやすい内容に変わったりすることによって、一般学生の授業・教員に対する姿勢に変化が見られ始めている。また、学生提案の授業科目(図5上)や教育改善学生交流(図5下)を始めとする**教育関連の催しへの一般学生の積極的参加の増加**は、この取組が決して単なる委員会活動で完結するものではなく、学生全体の、ひいては大学教育全体の大きな変化を導き始めている。

「与えられた環境で与えられる授業を受けるしかない」という諦めにも似た心境から、**学生の積極性が授業自体を変革することにつながる**のだという意識に変化しつつあるのである。例えば、教育問題に関する学内の意見交流誌『OU-Voice』に投稿する一般

図5 学生の主体的活動例



学生も増えてきているし、例年、大規模に行っている改善委員会からのアンケート（図6）にも積極的な意見が多く寄せられるようになってきている。また、オフィスアワーの利用度も着実に上がってきている。

一方、学生参画型教育改善の中核となる委員会活動自体も一定の教育的効果を有している。つまり、学生委員が、多くの教職員を含む委員会を統

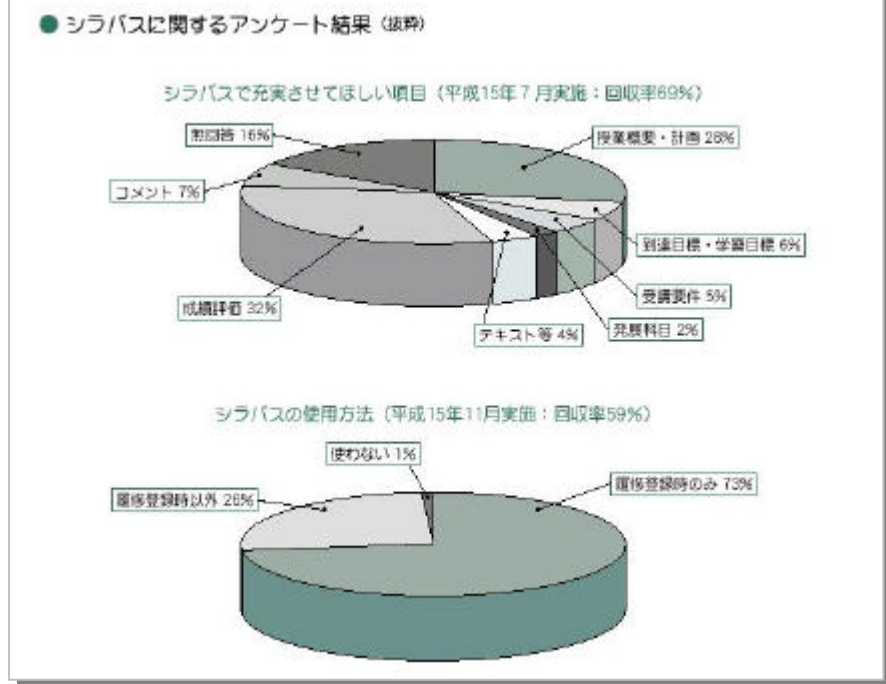
括したり、学部代表という自覚と責任の下で発言・行動したり、学生主体の様々な企画を立てたりすることは、自らの様々な能力開発と人間的成長を促しているわけである。そうした観点から、教員委員からはこの活動を単位化してはどうか、という意見も出されているが、そのようなインセンティブではなく、自分たちの提案が実現することや自分の能力向上自体に意義を見出している学生委員たちからは、むしろ単位や報酬は不要であるという意見の方が強い。この点は主体的な学びという観点からみれば理想的なことでもある。

「指示待ち症候群」と揶揄されがちな現代学生も、環境が整えば、大学の教育改善というおよそ主体的に取り組むには縁遠い内容であっても、積極的に取り組むし、学生委員の活動に直接・間接に刺激を受ける形で、一般学生もまた、大学教育に関して一定の関心を持ち始めるわけである。

（4）取組の組織性について

この取組はこうしたことに初めから関心が強い一部の学生がサークル的に取り組んだのでは長続きしないし、大学全体への広がりも弱い。実際、学生参画をその方式で取り組んで失敗している大学もいくつかある。本学が意識したのは、一度、確立したらそれが永続的に維持・発展するシステムの構築である。そのためには、中核となる「学生・教職員教育改善委員会」（平成16年7月に従来の「学生・教員FD検討会」を改称、組織強化）の学生委員は、基本的に毎年、各学部から1年次生を推薦してもらうことにこだわっている。常に新しい力が注入されつつ、活動を継続させ、しかも次の世代にも着実に学生参画型教育改善の意義と有効性を伝えていくことが大切なのである。また、初めから一定の関心がある学生も確実に委員に取り込むため立候補も受け付けているが、それらの委員もできるだけ学部推薦という手続きにのせるようにし

図6 学生によるアンケートを基にシラバスを改善



て、責任と自覚を意識させるようにしている。2年間の任期を終えた後も、支援スタッフとして委員を続けたいという積極的な学生はいわば一般学生としてこの活動に関わり続けているわけであり、そうした学生がさらに周囲の一般学生にも好影響を及ぼし、学部によっては、自然発生的に類似の組織(図7)が形成され始めている。

改善委員会自体は、学生が30数名、教員が10数名、職員が若干名の委員会組織にすぎない。しかしながら、そこで恒常的に積み重ねられる議論は、時には**各学部の代表の意見**として、時には**学生全体を代弁する意識**でなされるし、教員・職員側も大学教育全体を意識して対処している。また、同委員会を提案母体としてなされた提案は、大学の**公的審議ルートにのるため実現への道筋が明白**な上、提案から実現までの時間が短い。したがって、一般学生も次々と改善を享受することができる。

例えば、多くの大学で実施されている授業評価アンケートの実施内容や実施方法の決定や改善に学生が関与している大学はどれほどあろうか。本学では、この取組の成果として、**現行の授業評価アンケートは学生の視点をとりいれて大幅な改善**が行われた。(図8)その点では、この取組は全学生・全教員が関わっていると見える。議論・検討のプロセスでぶつけられる意見は、単なる個人的意見ではなく、さまざまな学生・教職員の代弁という性格が強いからである。無論、授業評価アンケートは一例に過ぎない。大学教育改善のあらゆる内容について学生の立場・視点からの意見がしっかり議論の俎上にのせられるシステムだということが重要である。

今日では、**学生が教員対象の学内FD研修の話題提供者の数人を占めている**ことな

図7 自然発生的に成立し始めた学内の類似組織の例

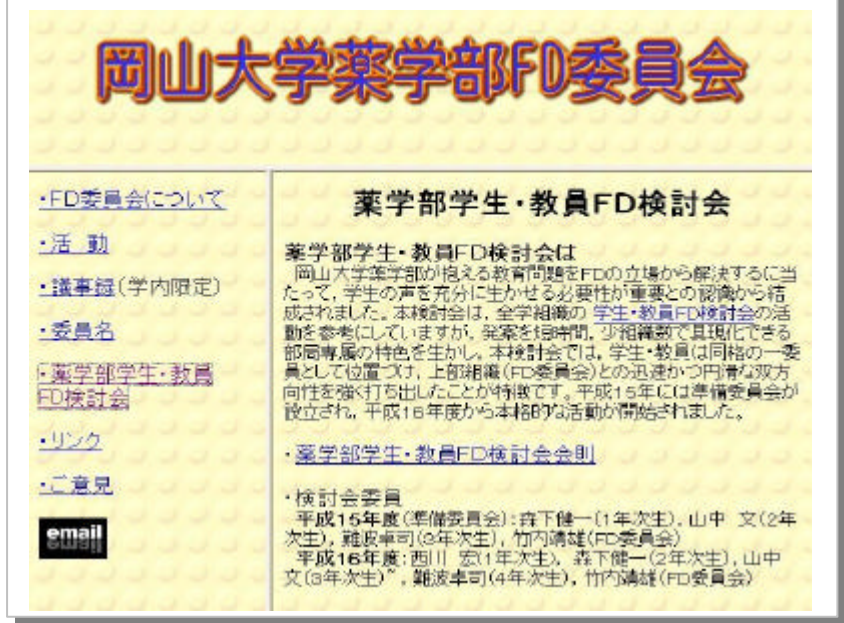


図8 学生提案を活かした授業評価アンケート

平成16年度岡山大学「授業評価アンケート」
教育開発センターFD専門委員会

【質問】
はじめに、
(1) この授業全体に対するあなたの評価を総合的に5段階で表して下さい。

続いて、この授業について、具体的に質問します。複数の教員による授業の場合、個々の教員によって多少評価の異なる項目もありますが、全体的に見てどうであったかを回答して下さい。

(2) 担当教員の授業に対する熱意・意欲を感じた。
(3) 教科書の選定、参考書の紹介、資料の配布は、適切であった。(実習・実験の場合：説明資料、教材、機器などの準備は、適切であった。)
(4) 板書や視聴覚機材の利用は、適切であった。
(5) 講義や説明は聞き取りやすく、理解しやすかった。
(6) 授業全体のスケジュールや1回の授業の時間配分は適切であった。
(7) 予習・復習についての指導や宿題・課題・レポートの指示は適切であった。

次に、あなた自身について、たずねます。
(8) この授業の予習・復習や宿題・課題・レポートなどに積極的に取り組んだ。
(9) この授業を受講することで、この分野の重要性をさらに深く認識するようになった。

ども、本学が、大学全体として教育改善を進めようとしている典型的な例（図9）と言えるが、これなども学生参画という新機軸を基底においたシステムでなければ実現はほとんど不可能である。

一方、経費面を含めた支援体制も年々強化されている。当初から、そうした支援体制を確固たるものとするため、中核となる組織には事務職員が配置され、物心両面での支援が進められてきたが、今日では、**職員からの意見の反映**という側面も強く持っている。経費という点では、特に、**他大学との教育改善交流の実現には一定の予算措置**が不可欠であったが、大学連携を視野に入れた大学のプランとも合致して平成16年度にまとまった予算を獲得でき、大きな第一歩を歩み始めたことが特筆される。

図9 学生が本格的に参画する学内FD研修

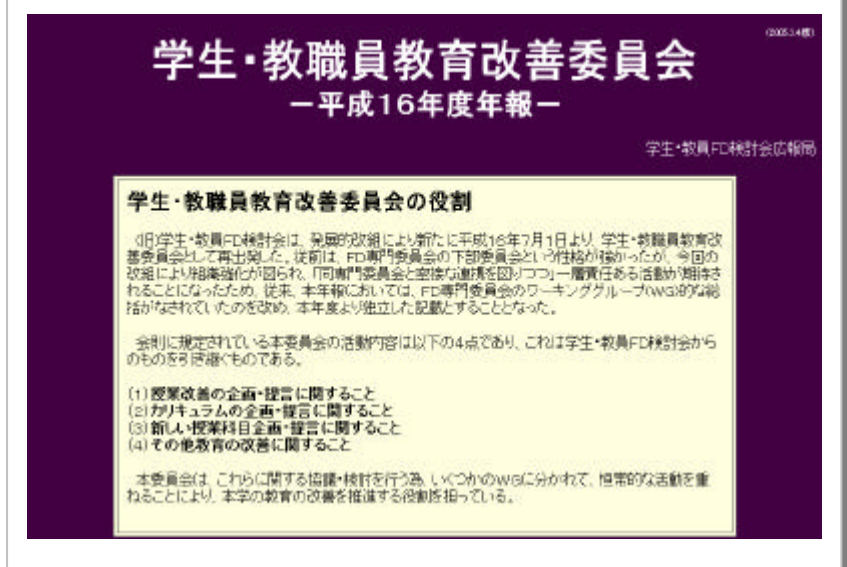


（5）取組の有効性について

（3）でも述べたように、この取組は直接的な教育プログラムではない為、狭義の「教育効果」については言及しにくい。しかし、改善委員会の6WG（新授業提案WG、シラバスWG、勉学環境WG、授業評価WG、夜間主WG、鹿田キャンパスWG）および全委員参加の企画（履修相談会，学生交流会）に恒常的に取り組み、それぞれ実績を積み上げていることは事実であり、それらが**一般学生の学習意欲の向上、ひいては学習成果の向上にもつながっている**こともまた事実である。

それをどのように評価するかに関しては、**法人評価の一部としてのチェックを中心とする定性的評価体制**が組まれている。すなわち、改善委員会の活動に対する評価は、法人評価に関わる本学の中期計画に「学生・教職員教育改善委員会の活動の充実・発展」が明記されており、他の項目と同様、本学の評価システムの**年度計画・中間検証・最終検証の対象**になっている。自己評価の観点として、この活動の充実がいかに一般学生の教育改善に寄与しているかが問われているのである。因みに、16年度の年度計画の最終検証では、「計画を上回って進行している」と総括評価されるなど順調に推移している。また、教育開発センターが毎年まとめている「年報」(図10)等を通じて、**学内外からの注視にたえられる**ようにしてある。さらに、交流を通じた他大学の学生や教員の目やマスコミの取り上げ方も、本学の学生参画の有効性を確認する場ともなっている。今後、一般学生や一般教員が本委員

図10 学内外への説明責任の一環として年報にも明記



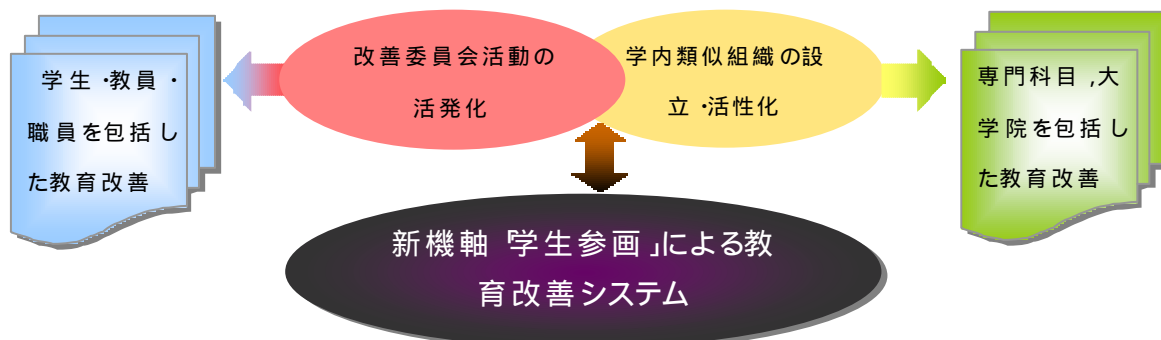
会の活動がいかに教育改善につながっているかという点をどう評価しているかを検証するシステムを導入する計画も進んでおり、17年度中にも実施する予定である。

(6) 将来展望について

まず、このシステムの中核をなす**改善委員会の活動自体が一層活発化**していくことが期待できる。それぞれのWGが、これまでの蓄積を活かしながら更に発展するであろうし、履修相談会のような自主企画の新たな創出も考えられる。教員研修との関わりも一層強まるものと思われる。また、平成16年度から開始した他大学との交流は単に本学からの発信・啓蒙にとどまらず、他大学での類似の活動の開始・発展が本学に新たな刺激を与えてくれることが期待できる。

一方、活動の学内への広がりという面では、既に自然発生的に誕生しつつある各学部の類似組織を横に繋ぐことによって、本取組が目指す、**構成員全体が深い関心を寄せる形での大学教育改善を一層推進**しやすくなる。改善委員会の中の鹿田キャンパスWG、夜間主WGが既にその性格を担っている面もあるが、一般学生への関わりという意味では、この面での発展は重要である。というのは、**学生・教員・職員を包括した教育改善**を推進・発展させるためには、**専門科目や大学院を包括した教育改善**も視野に入れる必要があるからである。

図1-1 新機軸「学生参画」による教育改善システムの将来展望



一般に、教育改善というと、狭義のFDという捉え方がなされがちで、これまで、本学が取り組んできた内容に対して、「FDのような教員側の問題に学生が口を挟む必要があるのか、また学生にその能力があるのか」という疑念の声も聞こえてくる。しかしながら、教育改善は、決して「教員側の問題」ではなく、「学生と教員との双方の問題」であり、内容によっては職員もまきこんだ「大学全体の問題」(広義のSDの問題)だというのが我々の認識であり、そのことにいち早く気づいたからこそ、本学は**学生参画を新機軸とする大学教育改善を推進**しているのである。学生がそうしたことに関心を寄せていなければ寄せるように努力すべきであるし、能力が乏しければ伸ばすことを考えればよい。

本学のスタンスは大学界ではまだまだ一般的なものではない。しかし、本学の取組をヒントとして、京都大、徳島大等**いくつかの大学では類似の活動**を展開し始めているし、(2)でも触れた教育改善交流もその契機として機能している。

既に本学の大きな特長となっている「学生参画型教育改善」が、今後、さらに大きな魅力を増すよう取組を一層深化・発展させたい。

3 データ、資料等

資料 1 学生・教職員教育改善委員会 会則(抜粋) 全文は <http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/>
(名称) 第 1 条 本委員会は、岡山大学教育開発センター学生・教職員教育改善委員会 (以下、委員会という)
という。

(目的) 第 2 条 委員会は、岡山大学教育開発センター運営委員会 F D 専門委員会と密接な関係を図りつつ、学生・
教員・職員相互の協力のもと、教育全般に関する企画・提言を行い、岡山大学の教育の改善を推進することを目的とする。

(組織) 第 3 条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- 一 各学部から推薦された学生委員 各 2 名
- 二 委員会から推薦された学生委員 若干名
- 三 各学部から推薦された教員委員 各 1 名
- 四 教育開発センター専任教員及び F D 専門委員会から推薦された教員委員 若干名
- 五 事務職員 若干名
- 六 その他、委員会が必要と認められた者 若干名

(任期) 第 3 条 前条第 1 号の委員の任期は 2 年とし、その他の委員の任期は 1 年とする。(以下略)

(委員長及び副委員長) 第 4 条 委員会に委員長、副委員長を置く。

2 委員長は、第 3 条第 1 項第 1 号及び第 2 号のうちから互選によって選出する。(以下略)

(活動内容) 第 5 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について協議する。

- 一 授業改善の企画・提言に関する事
- 二 カリキュラムの企画・提言に関する事
- 三 新しい授業科目の企画・提言に関する事
- 四 その他教育の改善に関する事

2 協議を円滑に進めるため、ワーキング・グループを設置する。

3 広報、記録及びワーキング・グループ相互の連絡調整を行うため、総務会を設置する。(以下略)

第 6 条 以下 略

資料 2 学生参画型教育改善の有効性を学内外に伝える大学広報の特集

(『いちよう並木』第 4 号 , 2 0 0 1 年 1 0 月 , <http://www.okayama-u.ac.jp/kohoshi.html>)



開催日時

2004年9月3日(金)

10:00~17:40

参加大学(順不同)

愛媛大学

徳島大学

香川大学

鳥取大学

鳴門教育大学

千葉大学

岡山県立大学

山陽学園大学

倉敷芸術科大学

ノートルダム清心女子大学

吉備国際大学

愛知大学

岡山大学

参加者数

約100名

Symposium & Workshop

第1回 東中四国
学生・教員教育改善学生交流

X-SEED

シンポジウム・ワークショップ
2004

プログラム

10:00~10:10 開会の挨拶
松本 新一 (岡山大学副学長)

10:10~10:35 岡山大学における学生参画型FDの現状と発展
橋本 謙 (岡山大学教育開発センター)

10:35~12:00 シンポジウム
学生参画型FDから見た学生参画型FDの発展
(新授業改善WG) 辻 俊太郎 (工学部2年)
(シラバスWG) 熱田 真由子 (法学部2年)
(FD学環委WG) 吉森 祐基 (法学部2年)
(授業評価WG) 藤田 崇治 (経済学部2年)
(X-Seed WG) 橋本 大輔 (教育学部3年)

12:00~13:30 休憩

13:30~16:00 ワークショップ(各ワーキンググループWG)
(新授業改善WG)(シラバスWG)
(FD学環委WG)(授業評価WG)

16:00~16:30 ティープレイク

16:30~17:30 閉稿 (各WGの報告及び感想)

17:30~17:40 閉会の挨拶
橋本 大輔 (実行委員長:教育学部3年)

**話し合いませんか。
あなたと、友と、
先生と…**

日時：2004年9月3日
会場：岡山大学創立五十周年記念館および
文化科学系総合研究棟
主催：岡山大学学生・教職員教育改善委員会

最新の情報は <http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/wg/X-seed/> に掲載しております。
ご質問等は stfd@cfd.cc.okayama-u.ac.jp まで

資料4 学生提案の新授業科目例(平成16年度シラバスからの抜粋)

主題科目(知の構造) 後期 911129

授業科目	大学授業改善論 Seminar on Faculty Development by Hashimoto method	後期 木曜・2時限 選択・2単位
主題キーワード	知識、方法	
授業内容キーワード	FD、授業改善、双方向、学生参画、橋本方式	
対象学生	全(但し旧カリキュラムでは「総合教養論」に相当)	
授業の概要	この授業は、 学生・教員FD検討会の新授業科目提案WGの発案を基に 、教員との協働作業により企画・開講される 「学生参画型」授業 である。内容的には、受講生が受けた(又は受けている)他の授業科目を題材としながら、大学授業改善のための方策を受講者全員で考えていこうとするもので、実際に、どの授業が分析・研究対象になるかは受講生次第である。	